灰左様なら

村松友視

灰左様なら
お茶
村松友視
講談社

灰左様なら
定価＝一三〇〇円（本体一二六二円）
著者＝村松友視
一九八九年六月二十六日　第一刷発行

発行者＝加藤勝久
発行所＝株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話（〇三）九四五―一一一一（大代表）
印刷所＝信毎書籍印刷株式会社
製本所＝株式会社黒岩大光堂
© TOMOMI MURAMATSU 1989 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、
文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-204439-0　（文二）

灰左様なら

装幀　原田維夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

朝四ツ刻、芝泉岳寺門前より出火した火事は、折からのはげしい南風にあおられ、車町、田町、本芝、金杉あたりから三田芝増上寺門前を経て、京橋、日本橋、筋違門内まで残らず焼きつくしたあげく、神田雉子町、佐柄木町まで炎の舌をのばし、東北は浅草本願寺にまで至った。丸の内は鍛冶橋、常盤橋が焼け、ここ下谷では、阿部川町が炎の洗礼を受けた。出火より五日目の朝からの、強い暴風雨によって鎮火したものの、その被害はすさまじく、万石以上邸宅六十二、万石以下三百二十二軒、町家十六万九十六戸、寺院千三百二十一がその猛威の犠牲となった。長さ六里余、巾一里におよぶ規模で、死人千二百人、牛馬の損失七十八頭……文化三年三月の大火は、これまでの目ぼしい江戸の火事に、またひとつの語り草をつけ加えたのだった。

（こいつあ、幸先が良いやら悪いやら……）

林屋正蔵は、節つきのひとり言を喉の奥でころがしながら、少し前までの自分の棲家が、灰と化している風景をながめていた。ほんの三月前、三笑亭可楽の門へ入って、朝寝房夢羅久らと轡

をならべ、芸に本腰を入れようと気を弾ませていた矢先、もとの寝ぐらが燃えて無くなったのを、気持の中でどうまとめればいいのかがつかめなかった。これまでの自分とちがう新しい門出を、この火事が象徴しているような気もした。だが、おまえの次の運命も燃えつきて灰になるのさと、焦土が不気味に語りかけてくるようでもあった。

（ままよ、どっちにせよ燃えたのは仮の寝ぐらだ）

正蔵は、芝居もどきに顎をなでていた右手で、ぽんと帯を叩いた。そして、大袈裟な咳ばらいを放って懐へ両手を突っ込んだ。正蔵は、可楽門へ入りたては三笑亭楽我と言っていたが、すぐに林屋笑三と改めたかと思うと、三転して林屋正蔵を名のった。これには師匠の可楽もあきれ返ったが、なぜかさほどの詮議もせずにやり過した。

可楽の門人は総勢二十五人いたが、三笑亭であるべき亭号を勝手に替えたのは、朝寝房夢羅久と林屋正蔵のふたりだけだった。夢羅久は正蔵よりもひとつ年上であり、しかも入門は享和三年で三年先輩に当る「兄さん」だが、そういうこととは別に、正蔵は夢羅久を競争相手として強く意識していた。

年齢だけで言うならば、師匠の可楽はわずか四歳ちがい、寛政十年より業としていたから、職歴としては八年の差があるとはいえ、どこか厳しい尊敬の念を抱く気分になれなかった。それは、正蔵がとりあえず入門したという軽い気持で師匠に対していたためでもあったが、夢羅久の存在がそんな気持を起させていたのだった。師匠の可楽の三題咄、三遊亭円生の芝居咄に対して、きょうだい弟子の夢羅久は、早くも人情咄の地盤づくりを意識しはじめている。夢羅久は、

麻布芋洗坂に生れ、麹町の質屋の丁稚となったが、浄瑠璃が好きで豊竹宮戸太夫の門に入り、豊竹戸志太夫と名のって浄瑠璃語りとなった。享和三年、可楽の門へ入って流俗亭玖蝶と名のったが、やがて三笑亭夢楽と改め、今度は勝手に三笑亭の号を返上して、朝寝房夢羅久を名のっている。師匠に無断で亭号を替える度胸もさることながら、夢羅久のいきおいを正蔵はうらやましいと思っていたのだった。

「それにしても、よく焼けやがったなあ」

うしろから声をかけられてふり向くと、いま頭の中でころがしていた当の夢羅久が、にっこり笑ってそこに立っていた。

「あ、あにさん……」

正蔵は、夢羅久がどうしてそこにいるのか訝った。

「火事と喧嘩は江戸の花てえことを言うけれど、こう見事にやられちまうと、味も素っ気もありゃあしねえなあ」

「あにさんも、この火事跡を見物に……」

「まあね、何しろこの火事は付け火だてえ噂だからねえ」

「付け火……」

「おいら、付け火をする奴の気持に、ちょいとばかり惹かれるとこがあってさ」

「そいつあ、ちょいと穏やかでない了簡でがすねえ」

「おまえさん、そこんとこ面白いとは思わないかい」

「面白いったってあにさん……」

正蔵は、わざと鳩が豆鉄砲を喰ったような貌をつくった。だが、夢羅久が付け火を面白がる理由は、実は何となく想像できないではなかった。

江戸の大火といえば、まず浮ぶのが明暦火事だ。正月元日から四谷竹町に火の手があがり、四日には赤坂町、五日は吉祥寺あたりと御中間町と火事がつづき、連日連夜、半鐘の鳴らぬ時がなかったという。そして十八日は、昼ごろに本郷五丁目裏の丸山本妙寺から出火、雨の降らぬ日が数十日つづいたあとでもあり、泉水も涸れつき、しかも風が吹き荒んだ。一瞬の間に火の手は数十町にのびて一面の大火となり、駿河台、鷹匠町、鎌倉河岸と焼きすすんだ。酉の刻より西風となり、一石橋、鞘町に飛び火、火事は伝馬町におよんだ。獄の守たる石出帯刀は、囚人を放って難をのがれさせた。この囚人たちが東に向って浅草門を出ようとすれば、門番はおどろいて扉を閉じ、すべての人々が外へ出られなくなったため、前後の火にせめられて焼死する者、堀水へ飛び込んで溺死する者が数知れなかった。死傷者を幾万と出したこの日の火事は、北は柳原、南は京橋を境いに、東は佃島、深川、牛島にいたり、家のないところでやっと鎮った。

その大火のため、死に残った人々があちらこちらで号泣し、父子、夫婦の死骸をたずね、子に別れ母を失って迷いさまよう者が道にあふれた。そんなありさまがつづいている翌日、またもや午刻に小石川の鷹匠町より火が起った。

北は駒込から南は郭外に火の手がのび、日暮れ方に風が変って、諸大名の高屋大厦を焼き払い、数寄屋橋の内外、日本橋、京橋、新橋、その他大小の橋々がみな焼け落ち、逃げる者も道を

失っておびただしい死者が出た。この火の手は海岸でようやく鎮ったが、その夜またもや麹町の町家から出火した。

この火は東北に向い、雉子橋、一つ橋、神田橋までひろがったが、風が北に変ると西丸、下桜田へと進み、焼け残っていた邸亭をことごとく焼きつくした。そして火の道はふたつに分れ、一方は通り町、一方は愛宕下から海辺へと至り、建てつづいた府下諸大名、諸士、庶民の屋宅はほとんど焦土と変じた。さらに北風はますます激しくなり、黒煙が本城に吹きかかったとき、天守二重目の胴窓が自ら開いてしまい、そこから火を吹き込んだため、天守まで火がついて数十丈にも燃え上った。富士見の櫓にも火がうつり、本丸の殿閣もことごとく焼失した。

この明暦の大火の被害は、本城ならびに二、三の丸の殿舎をはじめとして、諸大名の邸宅五百余軒、士庶の家屋は数える術もないほどだった。神社仏閣三百余ヵ所、蔵々九千余、市町のべて八百余町にいたり、道程に計れば二十二里八丁が大火になめつくされ、焼死者は十万七千四十六人と言われている。

これは俗に振袖火事と称され、この火事のことを夢羅久はよく正蔵に話して聞かせた。それは、人情咄を目論みはじめた夢羅久が、振袖火事のいわれにこだわっているせいにちがいなかった。

浅草諏訪町の大増屋十右衛門という商人に、おきくという十六歳になる娘があった。ある日おきくは、上野へ花見に出かける途中、山下のあたりで美しい若衆に逢い、それを見染めたのがもとで病気になり、明暦元年正月十六日にとうとう死んでしまった。上野へ花見に行くときに着て

出た紫縮緬の振袖は、娘が大変好きだったということで、それを娘の棺の上にかけて、菩提寺の本郷丸山本妙寺へ送った。

また、本郷元町の麹屋吉兵衛にお花という十六歳になる娘がいた。あるときお花は、近所の古着屋に紫縮緬の振袖があるのを見て、親にせがんで買ってもらった。すると、間もなくお花は病気になって、明暦二年正月に死んでしまった。その紫縮緬は、やはり棺の上へ掛けられて本妙寺へ送られた。ちょうどその日は大増屋十右衛門の娘おきくの一周忌に当るので、両親とも寺参りに来ていた。そして、自分の娘と同い年になる娘の葬式と聞いて不憫に思い、そっと本堂へ行って見ると、棺の上に掛けてある振袖が、おきくのものによく似ていると思ったが、その日はそのまま帰宅した。

また、中橋の伊勢屋五兵衛という質屋に、おたつという十六歳の娘がいた。そのおたつが、自分の家の質流れである紫縮緬の振袖が妙に欲しくなり、親にたのんで自分のものにした。すると、おたつはそれから病気になって、明暦三年正月十六日に死んでしまった。五兵衛は、おたつの棺の上へ紫縮緬の振袖をかけ、丸山本妙寺へ送った。当日はおきくの三回忌、お花の一周忌に当るので、両家とも寺参りをした。そして、おたつの葬式に出逢ったのだった。

いずれも同じ年の十六歳の娘をなくし、同月同日、同寺という因縁を嘆き合い、ともに回向をしようと本堂に集った。棺の上に掛けてある紫縮緬の振袖は、おたがいに見覚えのあるものだったので、三家ともども語り合って、相談の上、施餓鬼をして焼き捨てることにした。その紫縮緬がこの世にあれば、嘆きが増すし、不思議な運命を恐れてでもあった。紫縮緬を焼く日を正月十

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

八日と決め、三家の者たちは本妙寺の本堂の前へ寄り集った。和尚所化三十人ばかりで法華経を読みながら、かの紫縮緬を火の中へ投げ入れると、たちまち西北の風が吹き起った。火のついた振袖はひらひらと宙に舞い上り、本堂の箱棟に燃えついたかと思うと、たちまちに江戸中を焼き払う大火となった。

「火事てえやつは、事実だけは大袈裟に残してくれるが、原因はよく分らない藪の中てえことが多い。振袖火事だって、きっとどこかの誰かさんがこしらえた話なんだから……」

夢羅久は、明暦の大火そのものよりも、それを振袖火事として仕立上げたことに、どうやら気を惹かれているらしいのだ。そして、いま焼け跡をながめながら「付け火」という言葉をもらしたのも、頭の中で付け火とからむ人情咄でも浮べようとしているためにちがいなかった。

「あにさんは、この火事にも振袖火事のような因縁があると……」

正蔵は、夢羅久の目をのぞくようにして言った。

「だからさ、そんなことがあったって不思議はねえてえことさ。お七火事だってそうだ、何かそういう因縁ばなしがある方が、後世に言い継がれる火事になるだろうじゃあねえか」

「後世にねえ」

「火事に華があるって言っちゃあ変だが、どうせ焼けちまったんだから、そこに物語のひとつくらいからめてやるのが、おいらたちの仕事てえもんじゃないかと、ま、思うのさ」

「なるほど……」

正蔵は、いかにも夢羅久らしいとうなずいた。

明暦の振袖火事のときから、伝馬町の牢払いの新例がつくられた。牢奉行の石出帯刀が、牢屋に火が近づいてきたために、町奉行の命を待たずに、独断で囚人全員を切り放してしまったのだった。その際、「火災が鎮らば下谷の善慶寺に必ず集るべし、この儀をたがえず参りたらんには、死罪の者も命を申し助くべし、もしまたこの約束を違えて参らざる者は、草を分けても探し出し、その身のことは申すに及ばず、一門までも重き罪科に行うべし」と申し渡したところ、囚人たちもかたく義理を守り、火事が鎮ると同時に、ひとり残らず指定の寺へ戻って来た。それが例となって、伝馬町附近の大火の際は、いつも牢払いが行われるようになった。

「その、囚人が牢から出て牢へ帰って来るあいだの気持だよねえ、そこんところが面白い。お上を本当に信用するかしないかてえところが鍵だがね。さてお上を半分信用して、半分疑ってるとしたら、こいつあ妙な感じだろうてえわけさ」

夢羅久が、牢払いについてそう言っていたことがあった。おそらく、牢払いから鎮火までの囚人のありようを、夢羅久はあれこれと想像しているらしかった。

しかし、一般の町人にとって、牢払いは恐怖の的だった。牢払いがあると、人々は表戸を下ろしてしまうのだ。牢払いの囚人の中には、何人かで隊を組み「天下の囚人」と称して、強奪をほしいままにする者も多かった。何しろ、牢奉行のゆるしが出ているのだから、威丈高になるのも無理はない。そんな町々のざわめきにも、夢羅久は何やら捨てがたい感じを抱いているようでさえあった。

付け火……というのも、大火のあとでかならず取沙汰される噂だった。無宿人に嫌疑が向けら

れるのがつねだが、一般の町民の中にも疑心暗鬼が生じる。そのあたりの空気をも、夢羅久はきらいではないらしいのだ。だが、それは自分の想像を刺激されることに対する気の弾みであって、実際に付け火の犯人が捕えられたりすると、興醒めしてしまうのかもしれない。

「あにさん……」

正蔵は、ふたたび夢羅久の目をのぞき込んだ。

「あにさんは、火事てえものになぜそんなに深い思い入れがあるんです？」

「べつに、深い思い入れなんざ、ありゃあしねえさ。ただ、火事てえものは、妙にいろんなものを引きずり出すもんだなあと思ってるだけだよ」

「たしかに、いろんなものを引きずり出すのは事実だけれど、あにさんは火事に何か思い出があってのことなのかと」

「火事に思い出？　そんなものはありゃあしねえさ。ただ、この江戸に住んでりゃあ、いろんな火事を見ることができるんでね」

「ちげえねえ……」

正蔵は、夢羅久の言葉にとりあえず相槌を打った。

二十五人の可楽門下の中で、夢羅久は一歩抜きん出ている……正蔵は、それをはっきりと認めていた。いや、一歩どころか二歩、三歩も引き離されているのかもしれないという気さえしているのだ。夢羅久はいま、自分の分野を創ろうと必死になっている。それができる芸の力もあり、客もつかんでいる。人情咄……というのが眼目らしいが、その間口を絞り込みつつあるという段

階のようだ。火事をめぐっての人々や町のざわめき、火事の余韻、牢払いの時間などを、自分流に取り込むのはいったい何色がふさわしいのか、それをいま模索中といったところなのだろう。

それにしても、火事に対しての夢羅久の思い入れには、奇妙に生まなましいものがある。どこかで、あにさんは特別の思いをからめざるを得ない火事に出会っているのだろうか……正蔵は、そんな思いを胸の中でころがしていた。

「しかし何ですかねえ、水は低きに流れるてえことを言いますが、火もやっぱり低きへ流れるんですかねえ」

「何だいそりゃ」

「いえね、この下谷あたりはよく火事になるけれど、上野の山の下の低地でしょう」

「だから下谷てえくらいだ。ま、低いから火事があるというより、やけに建てこんだ小さい家が集っている土地柄だから、燃えやすいんだろ」

「あ、なある……」

「おまえさんね、そんなことも考えずに下谷へ住んでいたのかい。上野のお山や忍ケ岡に対して低地てえことで、下谷という名前がついたんだ。物事には何でもそういう理屈があるんだから」

「あにさんは、学があるからなあ」

「学じゃねえよ、こだわりだよ」

「……」

「人間、こだわりの動物だてえからなあ」

「誰が言ったんです、そんなこと」
「いま、おいらが言ったのよ」
夢羅久は、上機嫌に笑った。だが、そのあとじっと正蔵を見すえるようにした目が、やけに鋭かった。〝あにさん〟と言って自分を立ててはいるが、こいつの本音はかなりしたたかだというのが、どうやら夢羅久の正蔵に対する見定めのようだ。他の弟子の口から、正蔵は夢羅久の自分に対するそんな角度を聞き知っていた。
「しかし、火事はいいなあ」
夢羅久は、一面の焼野原を見渡して、すがすがしい声を発した。
「とにかく、何もかもがいっぺんに消えちまうんだから」
「だから、怖ろしいてえことだって言えるわけで」
「まあ、取り方だがね。つくったものがいっぺんに消えて、そこでまた新しいものができる。そいつもまたいっぺんに消えて、それをくり返しているうちに、江戸八百八町がつくり上げられていくんだから」
「なある……」
「おまえさんのその大袈裟な感心の仕方は、どうも嘘くさくていけねえなあ」
「……」
「怪談咄の方はどうなっているんだえ」
「怪談咄……」

「とぼけちゃいけないよ。おいら、おまえさんが自分流をあみ出そうとしているのは、先刻承知なんだからさ」

正蔵は、さっきと同じやけに鋭い目で自分を見ている夢羅久を、まぶしそうに見返した。

たしかに、正蔵は新しい怪談咄を模索していた。

話芸の源をたどれば、戦国期に牢人が軍書講釈をして歩いたのが起りとされるが、大名のお伽衆などから出た講釈師の系統もある。そして享保年間、神田伯龍や成田寿仙が出て、伊達騒動、黒田騒動などの御家騒動を読むようになった。さらに宝暦七、八年ごろには、馬場文耕が世話物をはじめ、心学と結びつけて教化的な道話を試みたり、「平かな森の雫」のごとき、宝暦四年から数年間にわたる美濃郡上藩の農民闘争に対する、幕府の弾圧ぶりを暴露した政談をつくった。このため文耕は獄門の極刑に処せられたが、講釈はかえって町民のあいだに根づくことになった。

古くは色物の一種であった落語もまた、民衆芸能として成立してきた。講釈と同様、大名のお伽衆をつとめた僧侶の身辺雑話から、町人を扱ったものへと変化し、場所も四辻や座敷、あるいは莚張りの小屋などが選ばれるようになった。

それまでの「しかた咄」などが落語として定型化してくるのは、天明から寛政にかけてであり、明和・安永期に形成された簡潔な江戸小咄を素材としたものが多い。新しい落語を実演する口火を切ったのは、大工の棟梁で狂歌をつくり、戯作をも執筆した立川焉馬だった。焉馬は、天明四年四月に自作の咄をはじめて口演し、その催しは以後、料亭で同好の狂歌師を主とする集り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com